おかげさま

編集・発行
おかげさまの会
足利市本城3－2055
樹覺寺あけし会館

心を弘誓の仏地に樹て

親鸞聖人は浄土真宗の根本聖典である『教行信証』の結びに、

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。

深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。

慶喜いよいよ重し。

と、この書物を書かれたお心持ちについて述べておられます。特に「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」というお言葉は、ご本願に遇わせていただいた者の生き方を示されたものとして大切に味わわせて頂かねばならないお言葉です。

「心」という字は、「こころ」と読みますが、また「しん」とも読みます。「心」は「芯」にも通じ、「中心」という意味にもなります。そして、「たてる」ということを「建」とか「立」でなく、「樹」という字で表されています。

木が大地に根を張り、大地から栄養分を吸収し、たとえ大風が吹いても土の中に張った根に支えられ倒れることがないように、苦難多き人生を生き抜く上での芯（信心）が、阿弥陀さまの広大で力強いお誓いの大地に根を張り、しっかりと支えられていることを「心を弘誓の仏地に樹て」と言

われているのです。

ところで、禅宗で大切にされている「寒山詩」に「八風吹けども動ぜず」という言葉があります。その八風とは、

①利…意にかなう利益　　②誉…陰で名誉を受けること

③称…目の前で称賛される　　④楽…様々な心身を喜ばすこと

という人が求めること（四順）と、

①衰…意に反する損失　　②毀…陰で不名誉を受ける

③譏…目の前で中傷される　　④苦…様々に心を悩ますこと

という意に反する四つのこと（四違）を言うのだそうです。どうでしょうか。有頂天になったり、腹を立てたり、いずれも私たちの心を揺るがすもので、私たち凡夫には「八風吹けども動ぜず」とはいかないようです流していけるのです、。

親鸞聖人は、たとえ心を揺るがす「八風」に吹かれ、つい思い上がることや、落ち込むことがあっても、阿弥陀さまのお慈悲に支えられている人は、けっして信心を揺るがすことはなく、そのような思いを広大なお慈悲の海に流していけるのです、と仰せになりました。

親に呼ばれて　～浄光寺報法話集～　藤澤信照

《あけしの郷　明石山樹覚寺》参加をお待ちしています

十二月十二月三十一日	除夜会(除夜の鐘)	
一月　一日	元旦会	
一月　十八日	初お座・懇親会	
一月二十・二十一日	栃木南組門徒研修会	
二月　一日	晨朝会	
二月　八日	仏婦如月忌	
二月十七・十八日	東京教区仏壮研修会	
二月　十八日	法話会	
二月二十・二十一日	栃木南組仏婦研修会	
三月　一日	晨朝会	
三月　一日	東京教区仏婦連盟研修会	
三月　八日	仏婦	
三月　十八日	法話会	
三月二十一日	春季彼岸会法要	
四月　一日	晨朝会	

真実の歩みは安心の歩み　念仏とともに

あけし酔話

「恩」とは、めぐみ、いつくしみのことである。

誰かから受けた恩を、自分は別の人に送る。そしてその送られた人がさらに別の人に渡す。そうして「恩」が世の中をぐるぐる回ってゆくということ。

「恩送り」では、親切をしてくれた当人へ親切を返そうにも適切な方法が無い場合に第三者へと恩を「送る」。恩を返す相手が限定されず、比較的短い期間で善意を具体化することができるとしている。社会に正の連鎖が起きる。

英語圏では「恩送り」に相当する概念が、Pay it forward(ペイ・イット・フォーワード)の表現で再認識されるようになった。

Pay it forward or paying it forward refers to repaying the good deeds one has received by doing good things for other unrelated people.

この"Pay it forward"をテーマに小説『ペイ・フォワード可能の王国』が書かれ、この本のアイディアをもとにペイ・イット・フォーワード財団が設立された。この財団は学校の生徒、親、教師に、このPay it forwardの考え方を広める活動をしている。

あけし　あれこれ

ゴ　イ　サ　ギ　（五位鷺）

先日、薄日よりの日に、会館に行くのにご本堂前まで来て、ふと会館を見ると、屋根の中ほどに大きな鳥がじーと停まっているのです。まるで沖縄の家屋に着いているシーサーのように微動だもせず遠くを眺めているようです。その堂々たる姿に見とれてしまい、珍しいことだと、住職を呼んで来て写真を撮ってもらいました。その後もしばらくそのままの姿でおり、置物のようでした。

その後,もしかしてメダカの甕メダカや池の金魚が減っているのは、あの鳥のせいかもと思え、気になっています。

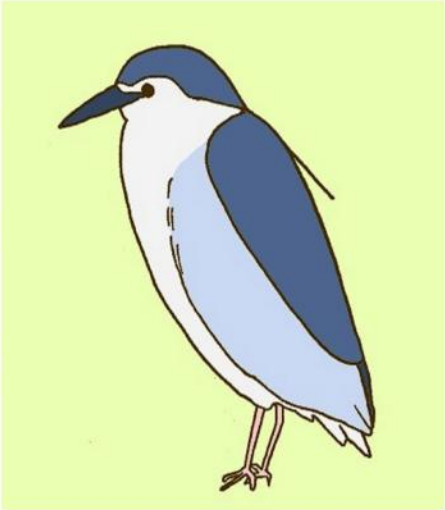
ゴイサギ（五位鷺）コウノトリ目　サギ科

夜のカラス

夜行性のサギ。全長５７㎝、ハシブトガラスよりひとまわり大きい。くちばしは長く７㎝、尾は短く１０．５㎝。頭の上と背、かた羽は青黒く、ほかの部分は灰色。あたまの後ろから白く長いかざり羽。足は黄色かオレンジ色。つばさの先は丸く２８．５㎝。あし７㎝。

クワッまたはギャーッとひと声ずつ鳴くことが多い。サギ科の鳥は、声をだす鳴官が発達しておらず、しぼりだすような声しかもっていない。

昼まは暗い森林のこずえやアシ原の中で休み、夕方から夜にかけて、水辺で魚やザリガニをとる。夜、街の上を飛びながらクワッと鳴いて人を驚かせることがあり、街なかの小さな川にもおりる。初夏に大群で森の木に巣をつくる。卵はあわい青、４～６こ。

平家物語

延喜式御門、神泉苑に醍醐天皇行幸あって、池のみぎはに鷺のゐたるを、六位をめして、「あの鷺とって参らせよ」と仰ければ、「宣旨ぞ」と仰すれば、ひらんで飛び去らず。これを取って参りたり。「なんぢが宣旨にしたがって参りたるこそ神妙なれ。やがて五位になせ」とて、鷺を五位にぞなされける。「今日より後は鷺のなかの王たるべし」という札を遊ばいて、頸にかけてはなたせ給ふ。まったく鷺の御料にはあらず、ただ王威の程を知ろし召さんがためなり。